ホトトギス
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別機密郵便物認可第六二七号
令和三年九月一日発行（第百二十四巻第九号）

ホトトギス

九月号

風雅の小筥〔四十四〕

廣太郎

この号を読まれる頃は、秋に入って少し残暑もあるが、いよいよ俳句にとっては格好の秋の季節と言えるだろう。ただ、この稿を認めている令和三年六月初旬は、未だ新型コロナウイルスの影響が強く、東京は緊急事態宣言が出され続けている。これを読まれている秋こそは、是非収束していて欲しいものだ。

かなり以前になり、お答えする機会がばたばたしていてついつい延び延びになっていたが、ある方からご質問があり、丁度秋の季題についての事であった。丁度この季節なので取り上げたいが「『ホ句の秋』等の『ホ句』は発句の『ホ』でしょうか？片仮名なのでホトトギス俳句の『ホ』かな？と思っていますが。」というものである。実は私も「ホトトギス俳句」と思っていた。実際数十年前に俳句を始めた頃に何度かこの言葉について当時ベテランのホトトギス同人の方にお聞きした記憶があるが、何か答が曖昧であったような思い出がある。歳時記も秋の傍題として説明無く掲載されているだけであり、虚子編、汀子編の歳時記以外では、私の調べた乏しい歳時記の資料にはこの語は出ていない。ただ、ネットで検索してみると、質問でお書き頂いているように「発句を語呂良く『ホ句』とした」という記述もあり、俳句が「俳諧の発句」から子規が考案した言葉である事を考えると、発句の意味で「ホ句」もより幅広い意味になるだろう。読者の方々はどのような御意見をお持ちだろうか。

PDF= 俳誌の salon

句日記

汀子

薬の名聞いてメモする秋灯下
又夜なべかと問はれたる外出かな
お隣の席の遠さよ秋の暮

九月十五日　無名会

庭掃除済めば秋めく気配あり
白萩の咲いてゐる日の二三人
ともかくも午後に間に合ふ秋の客
白萩の辺りともかく掃除して
秋草の色淡々とこぼれけり
杖持ちて一歩一歩や萩の花
水引の庭よりいつも引返す

九月十六日　夏潮句会

甘いもの口に秋めく心かな
体調をととのへしより秋めきぬ
夏用のマスクといふを給はりし
明日の旅あきらめしより秋めきぬ
水音に従ひしより新涼に
白萩のこぼるる辺り引返す

令和二年九月五日　芦屋ホトトギス会

邂逅の人集ふ会爽やかに
颱風の刻々といふ心置く
見舞はれて見舞ひ台風待つ心
杖持ちて年を諾ふ女郎花

九月六日　下萌句会

一陣の風吹き渡る萩の花
二三日家居楽しむ夕月夜
台風の行方気になる家居かな
杖持ちて庭に出て見る萩の花

九月七日　ロイヤル俳壇

一歩二歩戻り立ち寄る白萩に
一堂に会してならぬ秋灯下
又偲びたる友のこと秋灯下

忌日過ぎこれより夜々の月の秋
又出して秋の扇でありしかな
いつか雨止んでこれより月の秋
手に持ちてすなはち秋の扇かな
さつきまでありたる月と仰ぎ見る
さつきから月を探してをりしかな
雨さつと降りて止みゐし月の夜

九月十日　清交社

九月十五日　有恒俳句会

その縁なほつづきをり風の盆
準備せし安心今宵夜なべとか
世の中の変化に蹤いて行けぬ秋
後ろから蹤いて行けさう風の盆

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

令和二年九月二日　ＮＨＫ文化センター

颱風の近付いてくる空の黙

九月三日　蕉心会

虫の音を濡れ色に染め雨上る

漣にリズム刻みて水澄める

秋天を黒雲覆ひゆく早さ

新涼を纏ひて亀の重なれる

蚯蚓鳴く空の変幻見上げつつ

秋の蝶水恋ふ高さありにけり

街騒をはね返したる秋の蝉

一瞬の秋涼の風雨誘ふ

雨の色足してコスモス揺れ止まず

芭蕉の句歌ふテノール秋暑し

九月五日　芦屋ホトトギス会

颱風や危ふし花鳥諷詠詩

小望月孫の喃語に和みたる

夜食とる机の下に般若湯

女郎花五十六年前の恋

九月六日　野分会芦屋例会

放生会人は現在もて生れ

放生会禽獣虫魚友として

九月六日　青嵐会芦屋例会

赤蜻蛉夕日に吸はれゆく刹那

竿あれば竿を友とし赤蜻蛉

梨剥いて故郷の色足してゆく

とんぼうの空青々と忌日かな

大江戸の一隅に住み梨をもぐ

九月七日　カトリック新聞選者吟

女郎花余白に羽音忍ばせて

九月十日　土筆会

夕月夜都心に人を戻しつつ

露草や江戸の世語る句読点

還らざる日々鬼灯の音色にも

黄門の案山子の視線未来へと

九月十一日　六甲会

喪心を色に預けて秋日傘

眼裏に残る長さや穴まどひ

穴まどひ穴を忘れてをりにけり

父逝きて四十年や穴まどひ

濡れ色に日を弾きたる穴まどひ

穴まどひ君のピンヒールに蹴られ

九月十四日　朝日カルチャー若草句会

こほろぎに都心の夜を明け渡す

萩の戸を押せば羽音の響き合ふ

夜の静寂解いてゆきしつづれさせ

乱れ萩風が均してゆきにけり

父の年十四年超え月今宵

名月やこの世の芥流しゆく

ちちろ鳴く故郷の闇裏返し

九月十六日　北國文芸選者吟

穴まどひ横切る野外コンサート

九月十七日　前議員句会

新しき首相決りて竹の春

日本の未来占ふ野分かな

寄辺無く昼の虫鳴く都心かな

九月十七日　登高会

主婦といふ魔法の指で鰯裂く

鰯食ぶほどの人生歩み来し

竹の春首相官邸主替はり

曇天を掃き清めたる竹の春

宵月に未だ疎らなる都心かな

九月十八日　廣邦会

大江戸と小江戸を繋ぐ水澄めり

その中に命育む水澄めり

九月十九日　ホトトギス社句会

三日月や帰路の標として淡し

手を染めて心を染めて唐辛

三日月に覗かれてゐる逢瀬かな

三日月のこれより育ちゆく矜持

唐辛吊して村の染まりゆく

九月二十日　野分会東京例会

省略を尽し虫鬼灯鎮座

百万の羽音見送る放生会

闇灯すほどに鬼灯色付ける

九月二十二日　若水句会

幾柱露けく祀る忠魂碑

継続といふ露の世の至難かな

露けしや中止の続く句座数多

夕月に万華鏡めくビルの玻璃

タワーの灯懐に入れ夕月夜

出棺の警笛に湧く赤蜻蛉

九月二十三日　目黒学園句会

月白やビル影仄と染め上げて

胡麻干して夕日の色を足してゆく

月明に逝く俳諧の道を説き

光年の記憶留めて月の道

首相の座射止めし君に蚯蚓鳴く

九月二十六日　青嵐会東京例会句会中止選者吟

言の葉を覚えゆく孫小望月

鬼灯の鳴れば故郷近くあり

静寂の続く都心や夕月夜

秋日傘畳み夕日を見送れる

名月に舟の吸はれてゆきにけり

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

逞しき脚に血統持つ仔馬　八尾　山下美典
春闌けて花壇は色を極めたる　同　同
峡空を元気づけたる五月鯉　同　同
小鼓に謡に花下の風の席　西宮　本郷桂子
花吹雪貫く小鼓の一打　同　同
小鼓の連打の綴る花絵巻　同　同
八段の音立て落つる春の水　長岡　安原　葉
城址の一隅はやも花の雲　同　同
惜春の音なき雨の濡らす庭　同　同
老いしとは思うて言はず春寒し　相模原　木村享史
老梅や人も米寿を過ぎたれば　同　同
米寿行く残る寒さを蹴散らして　同　同
夕東風の吹き残したる星一つ　袋井　湖東紀子
若葉して世界最も美しき時　同　同
見ゆるものすべて輝き春愁　同　同
遠花火窓辺に寄れば風動く　東京　今井肖子
新涼やフルート光りつつゆらぐ　同　同
シーサーの鼻腔の白き秋涼し　同　同

飛魚や島を見ぬことはや三日　神戸　藤井啓子
舟芝居一番星へ子の科白　同　同
夕月のかかる二幕目舟芝居　京都　山崎貴子
どの色も好きよ若葉の色なれば　同　同
公園は子供の宇宙若葉風　香川　湯川　雅
若葉燃ゆ大樹を抱く母校かな　同　同
思惟の目を投ぐ春霖の向かう側　龍ケ崎　今橋眞理子
春陰や物の気配のまつはり来　同　同
待つために捨つる時間の薄暑かな　同　同
鳥の巣の一つは空に抱かれて　神戸　山田佳乃
藤棚に片寄せられてゐる日ざし　同　同
闇ほどけゆく春月の辺りより　同　同
春暁やまだ湖に夜のかけら　大牟田　平井裕子
山吹の揺れて朝日を招きをり　同　同
竹細工透かして柔き春日影　同　同
瀬音より速き一閃山女かな　同　涌羅由美
ふるさとの風の色なる新茶汲む　同　同
あの頃のままの駄菓子屋つばめ来る　同　同
うららかや一人歩きを見守りて　渋川　木暮陶句郎
ふらここの空と大地を分け入れて　同　同
しやぼん玉透かして母の顔見つめ　同　同
雪崩くる太陽を消し空を消し　同　同
うるはしき上州山河薄霞　同　同
両翼に妙義榛名や鳥帰る　同　同

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（七月号より）

ペルシャより来て恋猫の敵役　徳島　岩田公次

ペルシャより来たのはペルシャ猫だろう。あの毛の長い美しい猫である。恋猫は飼い猫であろうか。人間の目から見れば、外見では日本の猫はどうも分が悪く、飼い主は穏やかではないのだろう。まさに恋は国境を越えるという事態に、俳諧味が感じられる一句である。（紀子）

春になると猫も恋の季節となり、街中の雄猫は奇声を上げて雌を追いかけているようだ。様々な種類の猫が居るが、その中に血統書付きらしいペルシャ猫も恋猫として活動していたのである。それが、成就しかけていた「恋猫」の間に入ってきたのである。国際的な恋の鞘当のような表現が面白い。（廣太郎）

風となり水となりけり花の果　奈良　古賀しぐれ

爛漫を誇っていた桜もやがて花吹雪となり、落花の時を迎える。湖国を故郷とする作者にとって、風に散る桜の花びらは、琵琶湖の水に浮んでは流れ、花葛となる。「花の果」という捉え方が実に美しい。森羅万象を受け止めている、桜そのものとなっている作者の感興が、端的な表現の中に、見事に浮き彫りとなった妙。（さい雪）

毎年咲く桜の花であるが、昨今はコロナ禍で花見もままならなくなってきた。そんな中でも生命の営みは季節を違える事なく行われているのである。この年も花は綺麗に咲き、そして落花が始まり、そして花屑となり大空へ舞ったり、水の流れに吸い込まれたりしてその季節を終える。詩情が感じられる。（廣太郎）

PDF= 俳誌の salon

君のこと忘れはしない花菫　相模原　木村享史
自粛もう一年が経つさくら餅　同
対岸に日差集めて初時雨　東京　稲畑廣太郎
足早に舞妓過ぎ行く初時雨　同
近江路の旅ゆたかなる水の春　長岡　安原葉
老けふも持病に効くと蜆汁　同
草深くかすかに春の水の音　東京　今井千鶴子
遠き日や立子とつる女土筆摘む　同
何もせず何も起こらず春の昼　神戸　三村純也
マロニエの葉の整へば夏近し　同
西行も聴きし山風花吹雪　宇治　西村やすし
西行は遊行の人や花に死す　同
生涯の一書がありてあたたかし　熊本　岩岡中正
山法師いよいよ白き疫病かな　同
つまづける度に煌ぬく春の水　加須　岡安紀元
子が摘んで母が束ねてをりし草　同
糸一本縺れ風の柳かな　枚方　中嶋陽太
飽きられし風船いつか天井に　同

永き日の雀の声のまだ庭に　龍ケ崎　今橋眞理子
花衣装ふこともなく散りぬ　同
妻の忌や想ひ出巡る春の宵　東京　河野昭彦
春暁に独りの祈り妻忌日　同
藤色の影曳いてゆく春日傘　神戸　山田佳乃
皆集ひたる日を遠くして朧　同
ことの外心残りの桜散る　宝塚　水田むつみ
若草に貰ふ力の一歩かな　同
吉野より届く杉箸花見酒　鎌倉　星野椿
行年の海に落ちゆく夕日かな　同
初花となりゆく幹の気迫かな　東京　岩村惠子
全山の吉野の花はこの胸に　同
出勤の最後の一と日薔薇を受く　神戸　池田雅かず
薔薇を贈られてさみしく思ふとは　同
師在せば百と四つや亀の鳴く　同　和田華凛
継承のあり豆飯の塩加減　同
記念樹の無事に根付きて若葉風　淡路島　木下圭子
磯あそび旅の父子に島の児も　同

PDF= 俳誌の salon